

大阪府

水質と生き物と私たち

大阪府立水都国際中学校 二年

須摩淵 心

水をきれいにすればするほど、環境はよくなる。私はずっとそう思っていた。しかし、水をきれいにしたからといって、生き物が住みやすくなるとは限らない。

イカナゴは兵庫県の名産品だ。私の母は兵庫県出身で、祖母がよく手作りのイカナゴの釘煮を送ってくれる。毎年届くダンボールの中の瓶に詰められたイカナゴが、春が来たのだと知らせてくれる。今年の春も祖母からダンボールが届くことをとても楽しみにしていた。しかし、今年のイカナゴの水揚量は記録的に少なく、一日で漁を打ち切ることになってしまった。楽しみにしていたイカナゴを今年は食べられないと思うと寂しい気持ちになった。

なぜ、イカナゴが減ってしまったのだろう。そう思った私はイカナゴの不漁の原因について調べてみた。すると、イカナゴの数には水質が関係しているということがわかった。

イカナゴがよく取れる播磨灘や大阪湾では、高度経済成長期に工場や家庭からの排水で水質が悪化し、プランクトンが大量発生していた。この問題を解決するために、一九七三年に瀬戸内法を制定し、窒素やリンを含む工場排水が規制された。このことにより、水質は大幅に改善され、赤潮の頻度も減った。

しかし、近年は水質の改善の行き過ぎが問題視されている。イカナゴの不漁の原因も水質の改善の行き過ぎだ。窒素やリンが増えすぎると水質汚染の原因になってしまいが、一方で減らしすぎるとプランクトンの餌がなくなる原因になってしまう。水質改善が進み、窒素やリンといった栄養塩が減ったことで、イカナゴの餌となるプランクトンが不足し、餌を十分に食べていないイカナゴが増えているのだ。さらに、プランクトンの不

足はイカナゴの卵の数にも影響を及ぼしている。メス一匹当たりの卵の数は約三十年で約三割少なくなったことがわかっている。

水質を改善することはもちろん必要だが、私たちは水をきれいにすることだけに意識を向け過ぎていないのではないだろうか。私は、人間によって汚染された水を「きれいにする」のではなく、「元の状態に戻す」ということが大切だと思う。なぜなら、私たちが生き物と共存していくためには、水をただきれいにするのではなく、生き物が住みやすい環境を作っていくことが必要になるからだ。生き生きと暮らしていた生き物たちの環境を排水によって破壊し、水が汚くなったからといって水質改善を進めすぎ、結局は生物の命を奪ってしまった。水に対して人間の住みやすさのみを求めるのではなく、生物のためにも、私たちが壊してしまった環境を私たちが取り戻していかなければならないと思う。

ただの中学生一人が水質を管理したり、生き物を保護したりすることはできない。しかし、生き物にとってどれだけ水が重要なかを伝えることはできる。私はイカナゴの不漁の原因を知るまで、生き物と水質が深く関係していることを知らなかった。以前の私のように、水質が生き物の命を左右しているのだと知らずに過ごしている人はたくさんいると思う。だから、水質と生き物の関わりについて少しでも興味を持ってくれる人が増えてほしい。水質と生き物の関係について知ってもらおうことで、行動は起こせなくても水に対しての意識や見方は変わると思う。この作文を読むことで、一人でも多くの人に「水って大切なものなんだな」と改めて実感してほしい。そして、水と人間を含む生き物はお互いに支え合っているということを忘れずに過ごしていきたい。